111　福島原発事故後の住民の帰還意向と生活の質との関連	折田　真紀子

【目的】2011 年 3 月 11 日の東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所事故により原子力発電所から10～20 km に位置している福島県双葉郡富岡町は、事故直後から全町民が避難を余儀なくされた。2017 年 4 月に帰還困難区域を除く、すべての避難指示区域が解除されたが、2020 年時点で富岡町へ帰還した住民は 10%程度にとどまっている。帰還を希望する住民が感じている放射線被ばくに関する不安や精神的な健康へのニーズに寄り添ったリスクコミュニケーションの実施が求められていると考えられる。さらには、原子力災害によって避難を余儀なくされている住民の生活の質（Quality of life：QOL）の向上も重要であると考えられるが、一方で、原発事故後の富岡町町民における生活の質と帰還意向との関連は明らかにされていない。そこで、本研究は、富岡町において、QOL と帰還意向との関連を明らかにすることを目的とする。

【方法】20 歳以上の富岡町住民に対して無記名自記式アンケート調査を実施した。聴取項目は、基本的属性（性別、年代、同居の家族構成、18 歳以下の子や孫との同居の有無）、富岡町への帰還意向、放射線リスク認知、生活の主観的満足度、QOL 尺度 8-Item Short-Form Health Survey（SF-8）、ストレス対処能力尺度 sense of coherence13（SOC-13）であった。帰還意向に関連する因子の分析はカイ 2 乗検定を用いて解析し、帰還意向に独立して関連する因子の分析はロジスティック回帰分析を用いて解析した。

【結果】対象者の回答が得られた人数の内、1,018 名を解析対象とした。133 人（13%）はすでに帰還し（グループ 1）、222 人（22%）は帰還に悩んでいた（グループ 2）、663 人（65%）は帰還しないと決めていた（グループ 3）。グループ 1 に比べて、グループ 2 と 3 は有意に富岡産の食材を摂取することに懸念を持つ人が多く、グループ 1 は、グループ 2 とグループ 3 と比べて、有意に放射線被ばくによる自身へのがんなどの健康影響が起こると懸念している人が少なかった。また、グループ 1 は、グループ 2 とグループ 3 と比べて、有意に放射線被ばくによる子孫への健康影響が起こると懸念している人が少なかった。SF-8 の身体的な健康観、「身体能力」、「全体的健康観」のスコアが、グループ 1 と 3 に比べて、グループ 2 において有意に低かった。また SF-8 の精神的な健康観の内、「社会生活機能」、「心の健康」のスコアが、グループ 1 と 3 に比べて、グループ 2 において有意に低かった。グループ 1 はグループ 2 と比較して、その他の因子に独立して有意に 60 歳以上の人が多く、SF-8 の身体的な健康観が高かった。また、グループ 1 はグループ 2 と比較して、性別と年代に独立して、有意に SOC-13 のスコアが高かった。グループ 2 は、グループ 3 と比較して、その他の因子に独立して有意に身体的な健康観と精神的な健康観が低かった。グループ 1 と 3 を比較した結果、身体的な健康観と精神的な健康観において、有意な差は見られなかった。

帰還意向と基本的な属性、生活満足感、放射線リスク認知との関連

		グループ 1 (n=133)	グループ 2 (n=222)	グループ 3 (n=663)	*p 値*
性別	男性/女性	79/54 (59.4%)	122/100 (54.7%)	349/314 (52.4%)	0.340
60 歳以上	はい/いいえ	100/33 (75.2%)	147/75 (66.2%)	456/207 (68.8%)	0.200
18 歳以下の子と同居	はい/いいえ	8/125 (6.0%)	39/183 (17.6%)	146/517 (22.0%)	<0.001
主観的生活満足感	平均±標準偏差	5.01±2.3	4.89±2.3	5.87±2.4	<0.001
地元の食材を摂取することへの不安の有無	はい/いいえ	38/95 (28.6%)	124/98 (55.9%)	388/275 (58.5%)	<0.001
放射線被ばくによる自身の健康影響への不安	はい/いいえ	32/101 (24.1%)	102/120 (45.9%)	359/304 (54.1%)	<0.001
放射線被ばくによる遺伝的な影響への不安の有無	はい/いいえ	53/80 (39.8%)	142/80 (64.0%)	411/255 (62.0%)	<0.001